留学生の地域交流
—別府大学留学生、週末ホームステイについての報告—

藤　田　明　美

0. はじめに

ホームステイは異文化交流の手段の一つである。

ゲスト（留学生）にとっては、その国の家庭に寝泊まりすることで、違う国の日常生活を直に体験することができるし、受け入れる側（ホストファミリー）も、家庭にいながら、受け入れた学生の国について知ることができる。しかも、お客様ではなく、家族の一員として受け入れられるということは、外国での生活に不安やストレスを抱えがちな留学生にとって心強いものとなるだろう。その思いから、筆者は、別府大学留学生の希望者に対し、一昨年から週末ホームステイをコーデイネートしている。

筆者は、20年ほど前から、様々な国の留学生や外交官など、20人程をホストマザーとして受け入れた経験があり、その多くと、現在でも連絡を取り合っている。また、筆者自身も何度か海外でホームステイした経験があり、そこでお世話になった家族とは、現在でも交流がある。

筆者が現在、日本語教師という職業に就いているのも、受け入れたうちの数名が、国際交流基金に招聘され、日本で研修を受けていた外国人日本語教師だったということが要因の一つである。

筆者は自身の経験から、ホームステイを通した出会いや学びは、双方にとって、価値ある異文化体験であると同時に、将来への夢や可能性にも繋がっていくものだと確信している。

1. ホストファミリーのアンケートから

筆者がこれまでにコーディネートした週末ホームステイは10件程である。本稿では今後の参考に供するため、８つのホストファミリーに対して行ったアンケート調査の結果を報告する。

以下がアンケートに対する回答及び感想である。

≪ホームステイ受け入れ家庭アンケート結果≫
（単位は件数）

Q1、ホームステイ受け入れは、今回が
- ・初めて …… 2
- ・２回目 …… 1
- ・３回目 …… 2
- ・４回目以上 …… 3

Q2、今回の受け入れに関し、何か不安や心配なことがありましたか。
- ・あった …… 3
- ・なかった …… 5

＊あったとお答えいただいた方は、どの様なことが不安、心配でしたか。

①食事の面で、何でも食べてくれるかどうか心配した。

②家族６人の内、父親以外が全員女性で、受け入れた留学生が男子学生だったので、留学生が戸惑わないか心配した。

③留学生が祖父母とうまく馴染めるか心配した。

Q3、留学生のステイ中の態度はいかがでしたか。
- ・良かった …… 8
- ・良くなかった …… 0
- ・普通 …… 0

＊良くなかったとお答えいただいた方は、具体的にどのような態度だったのでしょうか

（全員が良かったと回答）

Q4、ホームステイ期間（２泊３日～４泊５日）はいかがでしたか。

・長すぎる …… 0
・短すぎる …… 1
・ちょうどいい …… 7

Q5、今回のホームステイ受け入れはあなたの家族にとって何らかの影響がありましたか。

・あった …… 6
・なかった …… 2

＊あったとお答えいただいた方は、具体的にどのような影響がありましたか。

①以前から受け入れは経験していたが、今回は日本にはない兵役について少し知ることができ、異文化の若者と接することで、自分の子どもたちの今後に大いに役にたった。
②韓国の留学生を受け入れたため、息子が大学の専攻科目に韓国語を追加して取るようになった。
③ホームステイした学生の国や地域に何か事件や災害などがあると、心配になる。
④娘しかいなかった我が家に息子ができた気持になった。
⑤受け入れた学生の出身国と日本との外交に問題が起きると、悲しくなる。

Q6、ホームステイ後、双方の交流はありますか。

・ある …… 8
・ない …… 0

＊あるとお答えいただいた方はどのような交流を続けられていますか。

①メールの交換などで近況を報告し合っている。
②手紙が届いた。
③子どもたちが頻繁にメールのやり取りをしている。
④子どもが留学生の国を訪問し、お世話になった。
⑤スカイプで交流している。
⑥まだ学生なので、時々友だちを連れて遊びに来る。

Q7、今後また受け入れをしても良いと思われますか。

・思う …… 8
・思わない …… 0

＊その理由をお書きください。

①勉強になる。
②海外旅行が大好きなので、生の外国語に接したい。
③受け入れ家庭にも色々あると思いますが、それも１つの日本の家庭の姿です。留学生にとっても、受け入れ家庭にとっても、相互理解をするためには、こういう交流こそが必要だと思います。
④子どもも大きくなって、現在夫婦２人暮らしなので、若い学生さんと交流できることがとても楽しい。
⑤異国のことについていろいろ聞けたこと。そして、何よりも素直でかわいかった。

＊アンケートとは別に御意見、御感想などがございましたら、ご自由にお書きください。

（ホストの感想から）

・これまでに何人かの留学生を受け入れたが、中にはホームステイを、安上がりの観光宿の様に考えている留学生もいた。でも、本当に礼儀正しく、感謝の心を持った留学生を受け入れると、逆に自分たち自身の襟を正し、今までの生活や生き方をも見直さなければ、という思いにさせられる。そういう留学生の国は、是非一度訪ねてみたいものだ。

・日本を選んで留学してきているのに学校や住まい、バイト先だけを行き来しているだけで、普通の家庭で過ごす事などほとんどない留学生が多いと思う。色々な家族、違う地域などで過ごしてみることは、日本を知るのに、絶好のチャンスだし、受け入れ家庭にとっても新鮮で、その学生の出身国が身近に感じられる。昨年、２泊３日で韓国の留学生を受け入れたが、時々「今頃どうしているだろう。」「また遊びに来てくれないかな。」などと思ったりしている。お互いに思いやること、そして、その時間こそが大切なのだと思う。

・一人の留学生を通して、何人かの学生のホームステイを久しぶりに引き受け、とても楽しい時間を過ごすことができた。学生たちから日本人との交流が少ないとの残念な話を聞き、学校の中で、日本人学生との活発な交流を後押しする取り組みがなされているのか心配になった。同じ出身国同士で固まってしまわぬよう、休み時間や休日などにアパートの中でじっとしていることのないよう、留学生自身の積極的な行動はもちろんだが、大学側も、もう一工夫が必要では…留学生には、留学先として日本を、そして別府大学を選んで良かったと思えるような有意義な学生生活を1人でも多くの留学生に送ってもらいたいと思う。

・我が家は娘（21）歳、息子（18）歳と年齢が近かったことで、すぐに馴染んでくれた。年末年始だったので、初詣に行ったり、おせち料理を食べたりと、日本のお正月を味わってもらえたと思う。実家に一緒に行った時には、両親も最初は戸惑っていたようだが、帰る時には、来年もまた来てほしいと言うほど、楽しかったようだ。1週間ほどの滞在だったが、別れる時はとても寂しく、悲しかった。今でも時々家族や親せきの間で話題になる。

このアンケート結果と感想から、留学生だけではなく、ホストファミリーにとっても、ホームステイは身近な異文化交流であり、好影響を各家庭にもたらしたことが推測できる。

2. 留学生の感想から

ホームステイのコーディネイトは、親元を離れて暮らしている留学生のために何かできないかと、始めたことだった。そのため、アンケートを実施して結果をフィードバックすることは考えていなかった。現在ではホームステイをした留学生のほとんどが帰国したため、改めてアンケートを取ることも難しい。ここでは留学生がホームステイ後に筆者に送った手紙やことばの一部を本人の了承のもとに紹介したい。

・6人家族のお宅にステイしました。最初は緊張しましたが、ホストのお母さんはとてもやさしく、いろいろなことを教えてくれました。一番の思い出は、お母さんと一緒にだんご汁を作ったことです。それから、おじいさんもおばあさんもとてもやさしかったです。

（韓国・女性）

だんご汁の作り方を教えてくれたお母さんと修了式で

・ホストのお母さんは少し韓国語を話す事ができました。大学生の娘さんとおかあさんとで、阿蘇にドライブに行きました。途中道が凍っていて少し怖かったのですが、帰国前のいい思い出になりました。

（韓国・女性）

・自分の両親ともこんなに打ち解けて話したことはありませんでした。ホストのお母さんもお父さんも娘さんたちもおばあさんもみんないい方たちで、食事の時一緒にお酒を飲んだせいか、緊張の糸がほどけて、ホームステイ初日にこたつで眠ってしまいました。その後、帰国1ヶ月前にホストがキャンプに誘ってくれました。今度はホストの友だちの家族と一緒で、小さな子とも遊びました。海岸で星をみながら話したり、花火をしたり、思い出がたくさんできました。ほんとにいい家族と巡り合えて良かったです。

（韓国・男性）

二組の家族と過ごしたキャンプ

キャンプでは皆で一緒に花火をした

・娘さんたちがみんな成長し、お父さんとお母さんは２人暮らしでした。男の子がいないということで、かわいがってもらいました。週末は市内に住んでいる娘さんが帰ってきて、一緒に大分市美術館など案内してもらいました。近所は自然がたくさんで、土手や河原も散歩しました。自分はまだ卒業まで時間があるので、時々遊びに来たいと思います。

（韓国・男性）

日本のお父さん、お母さん、お姉さんと

・ホームステイに参加させていただいて、ありがとうございました。わたしにとっては本当に、いい思い出になりました。正直に言うと、帰国する前にホームステイは出来ないんじゃないかなと思っていました。でも先生が最後までわたしのことを考えてくださっていたので、いい人たちと出会うことができたんだと、今は思っています。ホストファミリーは本当にいい人たちでした。初めて体験した日本の家族と一緒のお正月は忘れられない思い出になりました。日本に来たばかりの時は、何でもできる、何でもやってみようと、やる気満々でした。でも時間がたつにつれて、こんなはずじゃなかったと思うことも多く、やる気も段々なくなってしまい、日本での生活も面白くないと感じた時期もありました。そんな時に先生が小中学生との１泊２日の合宿に誘ってくれました。結果的にはすごく良かったのですが、最初は行くかどうか、相当迷いました。子どもたちとどんな話をすればいいのか、どうしたら喜んでもらえるのか全くわかりませんでした。でも、ありがたいことに、子どもたちの方からわたしに声をかけてくれ、話すきっかけがつかめました。合宿に参加されていた周りの大人の方たちから褒めてもらったり、頼りにされたりしたことで、自分に対して、少し自信が持てるようになりました。自分自身にとって、とてもいい経験だったと思います。帰国まであと1ヶ月も残っていません。日本に来ていろんなことをやりたいと思いましたが、思う通りにはできませんでした。でもいい人たちと出会ったし、先生からもいろんな貴重なものをもらったので、悔いはありません。国に帰っても、ここでの体験や思い出は一生大切にします。お世話になり、ありがとうございました。お元気で。

（韓国・男性）

この留学生は、夏休み前にホームステイを申し込み、ホストファミリーも決まっていたが、ホストとの日程調整がなかなかうまくいかず、たびたび延期されたた。筆者が小中学生との体験合宿に

誘ったのは、彼を元気づけようという思いからであった。

半年後に別のホストではあるが、ホームステイができ、彼の嬉しそうな顔を見た時は本当にうれしかった。

留学生は、希望と意欲に燃えて来日するが、次第に当初の思いが薄れていき、行き詰ったり、挫折してしまったりする者も少なくない。そのような留学生を励まし、自信を与え、充実した留学生活を送れるよう手助けすることも重要であろう。

3. 今後の取り組み

筆者は、今後も、ホームステイ希望者にはホストファミリーを探し、ホームステイをコーディネートしていきたいと考えているが、昨今の住宅事情や、家庭の事情もあり、ホストファミリーを探すのは容易ではない。

これまでの受け入れは、筆者の友人や知人に依頼してきたが、今後は他の方法も考えなければならないだろう。

その方法の1つとして、筆者がスタッフを務める、小中学生との交流合宿「体験合宿in大南」に参加した保護者宛に、ホストファミリー募集の手紙を配布した。

現在までの2週間で、2つの家庭が、ホストとして受け入れても良いと申し出ている。

また、日帰りならば、という家庭もある。

「2011年度・体験合宿in 大南」

もちろん、日本人と留学生がふれ合えるのは、何もホームステイだけではない。

先日、韓国語を勉強している友人が、話し相手になってくれる留学生はいないだろうかと言って来た。友人は韓国語が話せるが、韓国語を使う機会が少ないため、韓国語で話す機会を作りたかったのだ。同時に、韓国の文化に触れ、留学生と心の交流ができればと、望んでいた。

このような申し出を、アルバイトとしてではなく受け入れる留学生がいるか、という心配があったが、国際交流会に所属している韓国人留学生が、興味があるのでやってみたいと申し出た。

筆者がまず留学生本人に会って、趣旨を説明し、双方の都合のいい日時を決め、後は当人同士に任せることにした。

後に、聞いたところでは、留学生が友だちを連れて来たので、韓国人留学生二人と、友人、そして、韓国にとても興味のある友人の友達三人、計六人で、有意義な交流がなされたようだ。

ネイティブとの韓国語での会話は、語学の学習に役立っただけでなく、友人は二人の母親のような気持ちにもなれたという。

その後も、友人たちは数回会い、留学修了式の日に、お祝いとお別れのための会を持ち、名残を惜しんだという。

もう一つの事例として、竹灯篭作りを紹介する。筆者の地元の町並保存会が、毎年、秋の祭りのために竹灯篭を作っているのだが、会員の高齢化で、竹を切ったり、灯篭を組み立てたり、竹灯篭の周りを覆う和紙に絵を描いたりすることが困難になって来たため、手伝ってくれる人を探していた。

筆者が留学生が手伝ってはどうかと提案したところ、会の方からも、手伝ってほしいとの返事があった。

留学生に連絡したところ、夏休み中だったが、7人が参加した。留学生たちも竹灯篭作りは初めてだったようで、保存会の人たちに教わりながら、それぞれが、オリジナルの竹灯篭を作った。また、お互いの紹介なども兼ねながら、昼食を食べた。古い町並みや市の文化財でもある酒蔵を見学するなど、留学生にとっても貴重な体験となった。

留学生たちは、秋に、自分たちの作った灯篭に火がともされ、他の多くの竹灯篭と共に、街並みをうす暗く照らし出すのを見に、また来たいと言っていた。

11月の祭りの日に、実際に3人の留学生が、夏に世話になった保存会の人々との再会を喜び、明りの灯った自分の灯篭を写真におさめていた。

地元の方々と竹灯篭を作り、和紙に好みの絵を描いた

4. おわりに

別府大学日本語教育研究センターの教員の多くが、留学生に、「日本に来て良かった、別府大学で日本語を学んで良かった。」と満足して、帰国してもらいたいと考えているものと思われる。

「別府大学で学んだ留学生は、日本語が上手だ。」と時々耳にするが、彼らの、向学意欲を高めるため、また、異国で学ぶ彼らの心を少しでも支えるために、今後も、留学生のホームステイのコーディネートや地域との交流に出来る限り努めていきたいと考えている。

(2011年11月15日受付、2012年1月16日再受付)